



ジョン・ラーベ『南京の真実』試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永田, 喜嗣 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002949

ジョン・ラーベ『南京の真実』試論

永田 喜嗣*

はじめに

日中戦争の最中、中華民国の首都を目指して迫り来る日本軍と、守る国民党政府軍の戦闘による災いから無辜の市民を守ろうとした「南京安全区国際委員会」。その活躍により 25 万名もの市民が命を救われたという。その「南京安全区国際委員会」の委員会理事長を務めたドイツ人、ジョン・ラーベ。彼が残した日記が世界でほぼ同時に出版されたのは 1997 年のことだった。日本でも『南京の真実』¹のタイトルで講談社から出版された。それから 14 年になる。その間、「南京事件」に深くかかわりを持つ日本では、『南京の真実』をどのように受け止め、どの様に評価してきたのだろうか？

1. 道具としての『南京の真実』

当時、ジョン・ラーベの日記が発見されたという報は日本でも話題になった。マスコミ各社は新聞雑誌でこれを大きく取り上げた。しかし、日本では『南京の真実』は出版されても、論争の勝敗だけに興味のある南京事件の研究者たちにとって、期待したような「南京の真実」などそこには存在しなかった。『南京の真実』という本は歴史論争の雑踏の中へうち捨てられてしまった感がある。

「南京事件」の論争は、すでに 1980 年代から盛んに行われていたが、最もが激化したのは 1990 年代後半からだ。犠牲者 10 万人から 30 万人を主張する「大虐殺派」、対して、虐殺事件はあったが小規模だったとする中間派、まったくなかったとする「まぼろし派」。その論争は複雑に絡み合いながら現在まで続けられている。犠牲者数の大小の問題、軍服を脱ぎ捨てて、民間人に成りすました兵隊を殺害、あるいは処刑することが合法であるのかどうか？ そういった問題に終始し、その論争は各党派の「勝ち負け」の世界となった。 現在でも『南京大虐殺 歴史改竄派の敗北』と

* 大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士前期課程（人間科学専攻）

¹ ジョン・ラーベ、平野卿子訳、『南京の真実』講談社、1997

か『やっぱり有り得なかった南京大虐殺』などというタイトルの本が書店に並んでいる。何も知らない一般読者はいったい何を信じてよいのか分からず、いつしか、関心を持たなくなる。そして、「南京」と言う言葉を聞いた瞬間に、拒絶する傾向が世間的に強くなったと思う。

「南京事件」は日中戦争における「歴史修正主義」とそれに対する抵抗勢力の知力を尽くした戦いの象徴だ。そんな日本の状況をよそに、ジョン・ラーベの日記の発見と、その系譜の一つであるアイリス・チャンの『ザ・レイプ・オブ・南京』がベストセラーになって以来、海外では「南京事件」に向き合う研究者も増え、書物や史料集も出版されるに至った。そこでは、虐殺数の論争が主たるテーマという訳ではない。はっきりと「南京事件」の責任者と目される人物の名が書きとめられているにもかかわらず、日本ではその点についてはほとんど、触れられない。「虐殺数」と「虐殺」の存否を問う論争が日本では常に重要なのである。さらに、海外ではジョン・ラーベの日記やアイリス・チャンの著作が映画化され世界中で公開されているにもかかわらず、それらの作品は日本では、水際で上陸を阻止され、封印の憂き目にあっている。その問題に言及する者もほとんどいない。日本の「南京事件」研究は中国のそれと大きな隔たりを持っているだけでなく、ジョン・ラーベもアイリス・チャンも土俵の外に置いて、ひたすら国内での「南京論争攻防戦」を行うという独自の進化をとげてきた。反して、海外ではせっせと、この二人を研究し、成果を挙げてゆこうとしている。まさに「南京事件」における、日本の「ガラパゴス化」である。

そもそも、ジョン・ラーベの日記の発見が、日本の研究者にとっては「南京論争攻防戦」の勝敗を決するための道具だと最初から目されていた嫌いがある。日本語翻訳版である、『南京の真実』の巻末の解説にはこうある。

だが、このラーベ日記は、そうした南京安全区国際委員会メンバーの記録中에서도超一級品である。何故なら、日記のなかに込められている記録の豊富はいうまでもなく、ラーベが南京安全区国際委員会の代表であり、まさしく誠心誠意、その任務を全うし、多くの外国人や中国人に感銘を与えた人物なのがある。

南京惨事については、決定的な証拠や客観的な証言も少ないまま、思惑や憶測に左右された「南京論争」に流れがちであった。それぞれの牽強付会な論陣を張って、互いに譲ることはなかった。だがこのラーベ日記が広く知られるようになることで、その論争も新たな段階に入ることが期待される。ラーベの目で確認され、多くの情報で裏付けされた数多くの「真実」によって構成された超一級の資料が「論争」の

方向に絶大な影響を与えるに違いない。とくに「南京大虐殺はまぼろし」であるというグループにとっては、大きな痛手となるが、事実は事実として謙虚に認めることが大切である。²

ここでは「ラーベ日記」を「南京論争」に影響を与える「史料的価値を持った道具」とした評価が見られる。『南京の真実』という邦訳版の題名がすでにそれを示している。ドイツでは『ジョン・ラーベ、南京の善きドイツ人』、英米版は『南京の善き人』、中国版は『ラーベ日記』である。そもそも、ジョン・ラーベが自ら編集した原版のタイトルは『南京空爆』なのだ。『南京の真実』というのは挑戦的な邦題であったかもしれない。しかし、その挑戦は南京論争にだけ関心のある人々のあいだでは、誠実に受けとめられることはなかった。

「ラーベ日記」が超一級品だと言うことには私も異論はない。しかし、道具として使用するにしても日本語版『南京の真実』は貧弱すぎた。オリジナル原版『南京空爆』³からの唯一の全訳版（中国語）、『拉贝日记』と『南京の真実』を比較すれば、その情報量の違いは素人目にも分かってしまう。

ジョン・ラーベの日記が日本では評価されない理由として考えられるのは下記の点である。

1. 「ラーベ日記」は日本では最初から「南京事件論争」に影響を与える資料あるいは史料として捉えられていた。
2. 「ラーベ日記」の邦訳版『南京の真実』は各国語訳の中でも最も貧弱で不完全であつにもかかわらず、これが史料として「南京事件論争」で使用された。
3. 「ラーベ日記」に関する基礎的研究が我国ではまったく行われなかった。
4. 上記の3つの事柄によって「ラーベ日記」の存在意義、その他の可能性を探る機会も失われた。

こうした、諸問題から、我国における「ラーベ日記」の研究書は現在のところ一冊しかない。『真相・南京事件 ラーベ日記の検証』⁴という書である。著者の畝本正己は南京戦に参加し、戦後は防衛大学の教授でもあった人物だ。ラーベの日記の著述が事実かどうかを、軍人、民間人、または他の研究書と対比させて、細かく

² ジョン・ラーベ、平野卿子訳、『南京の真実』講談社、1997：323頁

解説・南京の惨事とラーベの日記 横山宏章

³ ジョン・ラーベが日記と資料集を纏めた原稿に付けたタイトルは *Bomben Über Nanking* だった。

⁴ 畝本正己『真相・南京事件 ラーベ日記の検証』、文京出版、1998

検証し、ラーベの記述内容をほぼ全面的に否定している。反証の為に挙げられた南京事件関係者の手記や日記、回想録の記述が「事実」であるという前提に立っての検証には疑問を感じる。しかし、それ以上の疑問がある。それは、検証対象の「ラーベ日記」を日本語訳版の『南京の真実』に限定している点である。畝本は『南京の真実』がジョン・ラーベの日記の全訳だと書いている。これは訳者、平野卿子の言と同じではある。しかし、『南京の真実』は決して「日記の全訳」ではない。

畝本は自著の検証において、『南京の真実』の底本となった、エルヴィン・ヴィッケルト編集版の *John Rabe Der gute Deutsche von Nanking*⁵ を検証したのであろうか？氏はエルヴィン・ヴィッケルトの編集姿勢についても批判しているが、オリジナル原版やその原版により近い中国語翻訳版『拉贝日记』まで、検証したのだろうか？さらに言えば、ラーベ日記発見の端緒となった、エルヴィン・ヴィッケルトの著作 *Mut und Übermut*⁶ まで、検証したのだろうか？私は決して、畝本正己の研究者としての姿勢を批判する者ではない。そうなった原因を考えるのである。日本語訳版が他の各国語版に比べて不完全であることや、「ラーベ日記」に関する基礎的な研究という下地が無いことが問題なのではあるまいか。もし、日本語訳版『南京の真実』が中国語版の『拉贝日记』ほどに完璧であれば、あるいはせめて、底本となったヴィッケルト編集のドイツ語版の完訳本であれば、畝本正己の研究書の記述も多少は変化していたかもしれない。『南京の真実』を「南京論争攻防戦」の道具として使用するのであれば、ジョン・ラーベの日記そのものを対象にした基礎研究がまず不可欠であり、そこが曖昧なままでは日記だけの問題では留まらず、論争そのものをさらに歪ませる可能性だってある。『南京の真実』を道具から解放し、基礎研究へ立ち返り、「ラーベ日記」の真価を探ることは「南京事件」の研究上での一つの空白部分を埋めることになるだろう。

そもそも、個人が書き残した日記を「南京事件論争」の史料とするところになり無理がある。例えばアンネ・フランクの日記『アンネの日記』をホロコーストの真偽に関わる証明する史料として使用するだろうか？

⁵ 「ラーベ日記」の日本語訳版『南京の真実』はジョン・ラーベの日記から直接翻訳されたのではなく、ラーベの友人であったエルヴィン・ヴィッケルトが編集した版をそこ本にしている。

⁶ エルヴィン・ヴィッケルトの回想録。この書物は『南京の真実』が刊行された翌年の1998年に、中央公論社から『戦時下のドイツ大使館』というタイトルで日本でも出版されたが、ジョン・ラーベに関する章は割愛されている。

仮に、アンネが聞いたBBCのニュースの内容が日記日付と合っていなかったでしょう。だからと言って、アンネの日記は信憑性がなく、史料価値がないと言う研究者がいるだろうか？少なくとも『アンネの日記』はホロコーストの悲劇の一端を伝えるものではある。しかし、後世のために残そうとした歴史史料ではない。「ラーベ日記」についても同じ事が言えるように思える。アンネ・フランクの日記もジョン・ラーベの日記も、一人の人間が書いた赤裸々な戦争と人間の記録である。

新たな観点から、ラーベの日記を再評価することは、まずは基礎へ立ち返り、ラーベの日記の成り立ち、複数存在する各国語版の紹介、そして実際の比較も行いたいと思う。

2. ジョン・ラーベの日記発見から出版へ

戦前、戦後を通じてドイツ外務省で外交官として勤務していたドイツ人、エルヴィン・ヴィッケルト氏が、1991年に刊行した回想録 *Mut und Übermut* (勇気と蛮勇) が日記発見への偶然のきっかけとなった。

ヴィッケルトは南京事件が起きる前年の1936年に中国へ旅行し、ジョン・ラーベ宅でホームステイした経験があった。*Mut und Übermut* の中で、ヴィッケルトは南京城の見学に出かけ、偶然、そこで少年の腐乱死体を発見してしまった騒動から、当時の中国の混沌とした状況などをジョン・ラーベから聞いたと述べている⁷。地方軍閥の残虐行為、中国国民党政府の汚職などの腐敗があった。ヴィッケルトはその後、南京事件でラーベが安全区の委員長になり、蒋介石や行政機関が逃亡した中にあって、敢然と残り、市民を守ったことを書いた。ヴィッケルトにとって、ジョン・ラーベは人生で出会った「博愛の人びと」の一人なのだという。この本を偶然にも読んだ、ジョン・ラーベの孫娘、ウルズラ・ラインハルトは祖父の記述に感激し、ヴィッケルト氏に礼状をしたためた。その手紙の中で、彼女は家族の誰も読んだことがないジョン・ラーベの日記の存在について明らかにした。ラーベ家では祖父、ジョンがナチス党员だったため、世間からの風当たりを恐れ、日記を隠して保管していた。ナチス党员だった祖父の経歴を罪のように感じつつ、その日記には触れずにいたため、ジョン・ラーベの南京での活躍についての詳細をラインハルト自身も

⁷ Erwin Wickelrt, *Mut und Übermut*, Deutsche Verlags-Anstalt GmbH, Stuttgart, 1991:210

知らなかったのである。日記はジョンの息子、オットーの手元に預けられていた。

日記は1994年に「発見」され、ヴィッケルトはこのことをニューヨークの「南京大虐殺殉難同胞連合会」の会長要職にあった邵子平⁸に知らせた⁹。この知らせに邵子平は「ラーベ日記」をぜひ出版して世界中に紹介したいと考えたが、ナチス黨員だった暗い過去の呪縛のために、ラーベ家ではその要請になかなか応える事が出来なかった。しかし、邵子平の熱心な説得によって、ラインハルトは決心し、ジョン・ラーベの息子、オットー・ラーベ氏から日記原本を受け取る。「ラーベ日記」はニューヨークの邵子平の元へ送られ、イエール大学で翻訳用コピー原稿が作成されることになった。時に1996年のことである。邵子平は恐らく、南京事件発生から60周年を迎える1997年に出版したいと考えたのだと思われる。ちょうどこの頃、邵子平に「南京事件」についての本を書きたいと協力を求めてきていた中国系アメリカ人作家がいた。その人物が『ザ・レイプ・オブ・南京』を後に書く事になるアイリス・チャンであった。アイリス・チャンもジョン・ラーベの存在を知り、邵子平にコンタクトを取っていたのである。この翻訳用原稿はドイツのエルヴィン・ヴィッケルト氏にも送られた。その他、アメリカ、イギリス、中国、日本へ各国語に翻訳用として各国の代理人へ送られ、翻訳作業が始まった。アイリス・チャンにも、1997年の1月に資料としてラーベ日記のコピーが引き渡された。

ヴィッケルトは「ラーベ日記」から特に南京事件と係わりの深い日記と資料を選択し、一冊の本として、編集した。このエルヴィン・ヴィッケルト編集版が日本で刊行された『南京の真実』で底本として使用されたものである。ヴィッケルトの編集作業と『南京の真実』の翻訳作業は同時進行という凄まじい状態で行われた。

ところが、このプロジェクトとは別のルートで、邵子平とラインハルトが日本に翻訳を依頼していた。クロード・ランズマン監督によるホロコーストの記録映画『シヨアー』のドイツ語部分の日本語字幕翻訳を担当した経験を持つ、細見和之とその有志たちの翻訳作業である¹⁰。この翻訳はヴィッケルト版に拠るものではなく、オ

⁸ Shao Tzping、1937年に南京で生まれた中国人。南京事件被害者の貴重な16ミリ記録フィルム、いわゆる「マギー・フィルム」の再発見者でもあり、このフィルムから南京事件の記録映画を製作した。

⁹ 1997年発行の日本語版『南京の真実』では訳者あとがきで日記の発見は1995年となっているが、2009年にドイツで再版された新装版の編者あとがきではヴィッケルト自身が1994年と記している。

¹⁰ この辺りの件については細見の著書『言葉と記憶』に収められた論文、「方法としてのパラタ

リジナル原版『南京空爆』の完訳を目指すものだった。すでに翻訳作業は始めていたにもかかわらず、残念ながら、このプロジェクトは出版社の著作権問題で未完に終わった。もし、こちらの計画も実現していたら、中国同様に日本も原版、ヴィッケルト版双方の翻訳を有することになったであろう。

1997年の秋、ドイツ、中国、日本で「ラーベ日記」はほぼ同時期に出版された。遅れて1998年にアメリカ、イギリスで英語版が出版され、これによって、ジョン・ラーベの南京での功績は一般に広く、知られることになったのである。

3. 複数存在する「ラーベ日記」のバージョン

発見から出版まで、まさに「疾風怒濤」の凄まじい速度で推し進められた「ラーベ日記」のプロジェクトは、それ故、バージョンによる混乱を後に残した。

以下、にそれを整理してまとめておきたいと思う。

1 オリジナル版と編集版

① 『南京空爆』(Bomben über Nanking)

ジョン・ラーベが書いた日記や書簡、資料を持ち帰り、自ら編集したものが『南京の敵機』と『南京空爆』と題された記録文書である。『南京の敵機』は第1稿(ファースト・ドラフト)と呼ばれ、日記、家族への書簡、報道資料、講演記録、他の外国人などの日記などが収められており、『南京空爆』は第2稿(セカンド・ドラフト)と呼ばれる、日記と資料を中心とした前後二巻の書類である。『南京空爆』がまさに真の「ラーベ日記」と呼ぶに値するものだろう。現在はイェール大学で保管されている。アイリス・チャンの『ザ・レイプ・オブ・南京』のジョン・ラーベの紹介くだりには、後述のヴィッケルト版には収録されていなかった1937年9月19日、20日付の事柄が紹介されているので、アイリス・チャンもこの版、『南京空爆』を使ったことは間違いがない。

② ヴィッケルト版(ドイツ語)

エルヴィン・ヴィッケルトが、上記①の第1稿(ファースト・ドラフト)と第2

クシス―「ラーベ日記」の公開によせて」に詳しく記されている。

稿（セカンド・ドラフト）の二種類の版から抜粋し、編集したバージョン。英、中、日と翻訳され出版されているもので、我々が最も容易に触れることが出来るバージョンである。日記はヴィッケルトが選抜して収録しており、すでに世間では公表されていた”DOCUMENTS OF THE NANKING SAFETY ZONE”¹¹などと重複する資料の収録は避けたようだ。選抜された日記からも削除されている箇所も多く、載っているその日付の日記が必ずしも完全とは言えないため、取り扱いには注意が必要である。抜粋された日記の全容を把握するには、このヴィッケルト版と、次項で紹介する中国語完訳版『拉贝日记』江苏人民出版社（中国語）1997年版を比較参照するしか方法がない。

2 翻訳、出版されたバージョン

① 『ジョン・ラーベ、南京の善きドイツ人』（ドイツ語）1997年版

Wickert, Erwin. *John Rabe Der gute Deutsche von Nanking*, Stuttgart: Deutsche Verlag-Anstalt, 1997

エルヴィン・ヴィッケルトが、ジョン・ラーベの日記原版から編集し、解説を補った、世界で最も多く研究に使われている版である。（前項（1）の②を参照のこと）

② 『南京の善きドイツ人』（英語）1998年版

John Rabe, *THE GOOD MAN OF NANKING The Diaries of John Rabe*, Alfred A.Knoopf.inc, 1998

翻訳：John E. Woods

ドイツ、中国、日本より遅れて1998年に発行された英語版。ヴィッケルト版の全訳ではあるが、読者の理解を助けるためか意識が目立つのと書き換えられている部分もあり、注意が必要。しかし、日本語訳版のように言葉の未訳や欠損はほとんどない。

③ 『拉贝日记』江苏人民出版社（中国語）1997年版

『拉贝日记』、江苏人民出版社、1997年

¹¹ 南京安全区国際委員会が記録した文書。1937年12月14日の第1号文書から1938年2月19日の第69文書までである。版によって文書番号の相違が見られるが基準とされているのは1939年に燕京大学の徐淑希教授によって編集刊行された同書である。

翻訳：本書翻訳組

現在まで出版された「ラーベ日記」では最も原版に忠実なバージョン。翻訳はヴィッケルト版に拠らず、ジョン・ラーベのオリジナル原稿を北京語に完訳したもの。『南京空爆』のセカンド・ドラフトから訳されたと推測される未編集バージョン。

出版されたものではヴィッケルト版以前のオリジナル『南京空爆』を知ることが出来る唯一のもの。長らく絶版となっていたが、2006年に同じ江苏人民出版社が刊行している『南京大屠殺史料集』の第13巻目に『拉贝日记』として完全復刻され、現在でも入手が可能である。

④ 『南京の真実』（日本語）1997年版

ジョン・ラーベ エルヴィン・ヴィッケルト(編) 平野卿子(訳) 『南京の真実』、講談社、1997年

講談社から刊行された、単行本版。ヴィッケルト版から翻訳された日本語版。訳者のあとがきによると、ヴィッケルトの解説、史料は抄訳、日記は全訳となっているが、完訳の意味ではないところが注意すべき点である。意識、あるいは直訳のため、意味不明な部分も多く、訳されていない単語も多いため、全訳と言いながらも抄訳的な印象が免れない。ドイツ語版に収録されている「ジョン・ラーベのベルリン日記」は未収録。また、ある日付の日記の記述が、他の日付に紛れ込んでいるなど、翻訳の途上での欠陥が目立つ。ヴィッケルト版からの翻訳では各国版の中でも最も不完全な物となってしまっている。

⑤ 『南京の真実』（日本語）2000年版

ジョン・ラーベ エルヴィン・ヴィッケルト(編) 平野卿子(訳) 『南京の真実』、講談社、2000年

講談社から発行された文庫本版、基本的に1997年のヴィッケルト版の翻訳と同じもの。ヴィッケルトの解説、資料が抄訳、ベルリン日記が未収録なのも変わっておらず、訳者のあとがきによると、1997年にヴィッケルトから送られてくる原稿を順々に訳していったため、全体的な確認が出来ていなかったようだ。¹²そのために、1997年に出版されたヴィッケルト版と付き合わせて修正を行ったという。1997年単

¹² 『南京の真実』380ページを参照。

行本版と2000年文庫本版のどこが、どのように修正されたのかについての検証は、今後の重要な課題の一つである。解説も単行本発刊から3年も経ているにもかかわらず、内容はまったく同じである。

⑥ 『ジョン・ラーベ、南京の善きドイツ人』（ドイツ語）2008年新装版

Wickert, Erwin. *John Rabe Der gute Deutsche von Nanking*, münchen: Goldmann Verlag, 2008

2008年に公開された映画『ジョン・ラーベ』（フローリアン・ガレンベルガー監督）の公開にあわせて、刊行された1997年のヴィッケルト版の新装版。変更された部分は次の点である。前書きはヴィッケルト自身が2007年に新たに書き直したものが収録された。最後のヴィッケルトによるジョン・ラーベについての解説に新たに「日記の発見」という新しい項目を加えることによって、日記の発見から発刊に至るまでの経緯がより明らかになっている。あとがきとして、ジョン・ラーベの孫であり、「ジョン・ラーベ平和記念財団」の理事長でもあるトーマス・ラーベ博士の文章と、映画『ジョン・ラーベ』の監督、フローリアン・ガレンベルガーの文章が追加収録されている。1997年版にあった当時の記録写真は排され、映画のカラースチール写真が24枚収録されている。

⑦ 『拉貝日記 精装典藏版』金城出版社版（中国語）2009年版

约翰拉贝, 『拉贝日记 精装典藏版』金城出版社版, 2009年

翻訳: 朱刘华

映画公開に併せてドイツで刊行された⑥の版の中国語訳版。大型の単行本で『拉貝日記 精装典藏版』と題されている。中国では初めて訳出されたヴィッケルト版を底本としたもの。訳者は③とは別人のため、使用される単語などは微妙に違っているが、正確丁寧に訳されている。この版の刊行で、中国は「ラーベ日記」のオリジナル版、ヴィッケルト版を二種を翻訳し、刊行した唯一の国となった。その意義において、重要である。惜しいのはこの版で、フローリアン・ガレンベルガーのあとがきが未収録に終わったことである。

⑧ 『ジョン・ラーベ、南京の善きドイツ人』（ドイツ語）2008年CD朗読版

Der gute Deutsche von Nanking, John Rabe, Gelesen von Ulrich Tukur

映画『John Rabe』の公開に併せてランダムハウスから発売された3枚組みの朗読CD。ヴィッケルト版のジョン・ラーベの日記、書簡などが朗読されている。「John Rabeのベルリン日記」もここに収録されている。朗読は映画で、ジョンの役を演じたドイツの俳優ウルリッヒ・トゥクールである。

3 実際の比較

では、ここからは実際の比較を行ってみることとしよう。ただし、今回その比較は二点に絞ることとする。さらに検証箇所も日記2日分、3箇所に絞ることとする。使用する比較対象は下記の4冊である。

『ジョン・ラーベ、南京の善きドイツ人』（ドイツ語）1997年版

以下、ドイツ語版と記す。

『拉貝日記』江苏人民出版社（中国語）1997年版

以下、中国語版と記す。

『拉貝日記』江苏人民出版社（中国語）2009年版

以下、中国語版2009年版と記す。

『南京の真実』（日本語）1997年版

以下、日本語版と記す。

検証する点は下記の二点である。

① 訳語の適切さの問題

1937年11月29日の日記から検証

② 原版→編集→翻訳による弊害

1937年12月15日の日記から検証

3-1. 訳語の適切さの問題

前章で述べた通り、日本語版は「南京事件論争攻防戦」への道具として使用される可能性が最初から高かった。横山宏章はあとがきで、「超一級の資料」と呼んでいる。この言葉は現在でも中国では引用されており、ジョン・ラーベの日記は日本人自身がその資料性の高さを評価しているということになっている。対して、翻訳に当たった平野卿子のあとがきには、「歴史事項の確認、中国関係の固有名詞の特定は、もとより訳者の手に負えるところではない。」とし、文庫版に至っては「なお読みやすさを考え注は最小限にとどめた。」とある。「超一級資料」であるならば、史料と

して「南京事件論争攻防戦」に使われることは十分に想定されたはずだ。なのに、歴史的な事実の確認は手に負えないとか、注を最小限にとどめるといっているのはいかなものだろうか？私は何も平野の翻訳家としての技量、姿勢、適正について批判しているのではない。同じ一冊の本で、翻訳家と監修に当たった研究者との間に最初からこんなにも大きな意識の差異があること自体が、問題ではないかと思うのである。それを示す例を挙げてみよう。

1937年11月29日の日記から検証

1937年11月29日の日記の一節である。

ドイツ版 75 頁

Der Generalissimo hat dem Komitee 100000 Dollar zur Verfügung gestellt.

英語版 40 頁

The generalissimo has placed 100,000 dollars at the committee's disposal.

中国語版 117 頁

最高統帥向委員会提供 10 万元経費。

中国語版 2009 年版 51 頁

最高統帥向委員会提供了 10 万元経費

日本語版 71 頁

蒋介石は委員会に十万ドルの寄付を申し出た。

日本語版 2000 年版 80 頁

蒋介石は委員会に十万ドルの寄付を申し出た。

上記の文章はまったく同じ意味を示している。時制等に多少の差異があっても意味は変わらない。ドイツ語から和訳すると、「大総帥が委員会に 10 万ドルを提供した。」という意味になる。問題なのは主語である。ラーベの書いた原文の主語は「Der

Generalissimo」だ。「大元帥」「大総帥」「総統」などを意味する言葉だが、明らかにこれは国民党の総統を意味しているものと分かる。しかし、蒋介石だとはラーベは書いてはいない。「Der Generalissimo」が間接的な解釈として「蒋介石」だと読者は分かるかもしれない。あるいは、分からないかもしれない。日本語版を除く、英語版、中国語版も原文に倣った表現に訳している。しかし、日本語版のように主語を「蒋介石」としてしまえば、ニュアンスがずいぶん変わってしまう。日本語版の訳を見れば、あたかも蒋介石、個人の行為のようにも理解できる。しかし、ラーベはそうとは書いていない。「Der Generalissimo」を主語にしているということは、国民党政府の最高指導者の行為の意味なのだ。個人的な行為ではなく、政府の公式な決定に基づくものであるとはっきり理解される。恐らく、訳者は「蒋介石」と意識した方が、一般読者には理解しやすいと考えたのだろうが、小説を訳すのとはわけが違う。歴史の「第一級の資料」と呼ばれるこのような性格のこの書物には、このような論争上、誤解を与えかねない意識はむしろ危険なのだ。すでに、ここで日本語版の制作上の取り組みの弱さが見て取れるのである。

3-2. 原版→編集→翻訳による弊害

ジョン・ラーベが書いた日記の原版を、エルヴィン・ヴィッケルトが編集した段階で、多くの日記や資料が割愛された。しかし、ヴィッケルト版は今まで世に出てこなかった資料の多くを出来るだけ多く掲載することに努力を払っていた。中国語版はもとより、原版を全訳したものであるので、全てが収録されている。しかし、日本語版ではヴィッケルトが苦心して纏めた資料集も、解説も、かなり省略されてしまっている。しかも、原版か抜粋された日記文、からさらに日本語翻訳の段階で未訳の単語も多くあり、中には意味が多少違ってしまったものまである。ここではその実態を1938年12月15日の日記で見てみることにしよう。この日付の日記は南京を陥落させた日本軍側とラーベたち委員会側が、会見し、重要事項を決定したという極めて重要な部分の一つである。

ドイツ版 111 頁

Um 10 Uhr früh erhalten wir den Besuch des Marineleutnants Sekiguchi. Wir geben ihm Kopien unserer Briefe an den Oberkommandierenden der japanischen Armee.

英語版 69 頁

At 10 a.m. we are paid a visit by naval Lieutenant Sekiguchi. We give him copies of the letters we have sent to the commanders of Japanese army.

中国語版 179 頁

上午 10 点，日本海军少尉关口来访，他向我们转达了海军“势多”号炮舰舰长和舰队军官的问候。我们把致日本军最高司令官的信函副本交给了他。

日本語版 112 頁

朝の十時、関口鋳造少尉来訪。少尉に日本軍最高司令官にあてた手紙の写しを渡す。

この翻訳を見るとドイツ語版の情報量に対して最も情報が少ないのは日本語版、ドイツ語版とほぼ同等が英語版、逆にドイツ語版より情報量が多いのは中国語版である。中国語版には「彼は私たちに海軍砲艦“勢多”艦長と士官からの挨拶を渡した。」という関口中尉の訪問理由が記述されている。オリジナルの日記『南京空爆』にはこの記述があったものと考えられるが、ヴィッケルト版での編集で、何故かこの部分が落ちたのだ。しかしながら、ドイツ語版や英語版では「午前10時我々は関口海軍少尉の訪問を受けた。」となっているので、少なくとも関口少尉が海軍士官であることは分かる。さらに「我々は日本陸軍の最高司令官に宛てた手紙の写しを渡した。」とある。ラーベたち委員会メンバーは陸軍の最高司令官に送った手紙の写しを日本海軍関係者に渡したのだ。ところが、日本語版では「関口鋳造少尉」「日本軍最高司令官」だけの記述になっており、その関係がまったく分からない。なぜ、「海軍の関口少尉」「日本陸軍最高司令官」と原文どおり訳さなかったのだろうか。しかも、原文にない「鋳造」という関口少尉の名前を勝手に付加している。ラーベは Sekiguchi としか書いていないのだ。南京戦における海軍と陸軍は協調関係にあったが、命令系統はそれぞれ独立していた。日本陸軍の最高司令官は中支那方面軍の松井大将であり、海軍は上海に司令部を置いた第三艦隊の長谷川中将だった。海軍と陸軍の使い分けた明記は重要な要件であったはずなのである。

このように、原版から編集、さらにその編集版の翻訳でその作業を簡略したり、付加したりすれば、原版からはかなり隔たったものになってしまう。

ここで、ドイツ語版、中国語版から組み立てたオリジナルの復元翻訳文と、ヴィ

スケルト編集後の翻訳、そして日本語版の三つを並べて比較してみよう。

① 仮に中国版から推測されるオリジナルな原文からの拙訳

朝の十時、関口海軍少尉の来訪を受ける。少尉は我々に砲艦「勢多」艦長および艦の士官からの挨拶状を渡した。我々は少尉に日本陸軍最高司令官へ送った手紙の写しを渡した。

③ ドイツ語版拙訳

朝の十時、関口海軍少尉の来訪を受ける。我々は少尉に日本陸軍最高司令官へ送った手紙の写しを渡した。

④ 日本語版

朝の十時、関口敏造少尉来訪。少尉に日本軍最高司令官にあてた手紙の写しを渡す。

この変遷を見れば、日本語版に至っては意味が同じでも情報はほとんど半減してしまっているのがよく分かる。

同じ日付の日記でもう一つの例を見てみよう。

国際安全委員会と日本側の交渉が行われた議事録である。

ドイツ語版 112 頁

Über die Zusammenkunft mit dem Chef des Stabes der japanischen Armee in Nanking

英語版 70 頁

Of Interview with Chief of Special Service Corps

中国語版 181 頁

与日军参谋部参谋长在南京

日本語版 113 頁

南京における日本軍特務機関長との話し合いについて

*先に紹介した『真相・南京事件 ラーベ日記の検証』の著者の畝本正己はこの日本語版の「日本軍特務機関長」を引き合いに出して述べている箇所がある¹³。しかし、ドイツ語版を見ればラーベは「特務機関長」など一言も書いていないのである。ラーベの記述は「南京における日本陸軍の参謀長」となっており、これは中国語版でもまったく同じである。日本語版の「特務機関長」の出所は恐らく、南京安全区第6号文書である。この文書は、ラーベの日記のこの箇所とほとんど同じ内容である。その文書の題名が「Interview with Chief of Special Service Corps」となっている。『南京大屠殺史料集⑫英美文書・安全区文書・自治委員会文書』でも確認してみたが、第6号文書は『日本軍特務機関責任者』となっている。つまり、日本語版が翻訳される際にラーベが書いている「日本陸軍参謀長」という記述と、「ラーベ日記」が発見される以前に、すでに広く知られていた「南京安全区第6号文書」との間に差異があったために、「南京安全区第6号文書」の表記に辻褃を合わせたのである。これはすでに「誤訳」や「意識」の域を越えている。明らかな「改竄」である。ラーベの記述がそのまま掲載されるべきであった。辻褃を合わせて終わらせるのではなく、ラーベの記述と南京安全区第6号文書¹⁴との違いが意味するものを解明するのも研究の一つであったはずだ。

このように原版から編集、翻訳から出版に至るまでに情報が極端に減少し、改竄されてしまう事例も確認できる。私たちは翻訳文書に触れる時に、「誤訳」や「意識」を意識しがちだが、訳されていなかったり、掘り替えられていたりする可能性も十分に留意しなければならない。『南京の真実』のうち2日間の日記の僅か3箇所だけでもこれほどの大きな問題を見ることが出来るのである（しかもこの2日間は決して作為的に抽出したものではない。同様のことは他の日付の記述においても指摘できる）。これを「日記の全訳」と呼べるのであろうか？

「ラーベ日記」を道具として使うのも、人間の記録として読むにも、このような欠陥や貧弱さを有している限り、『南京の真実』は「真実」を語ることは出来ないのではないだろうか？

¹³ 畝本正己 91 頁

¹⁴ 注 11 を参照のこと。

4. 今後の課題

横山宏章がかつて書いたように、「ラーベ日記」は「超一級資料」であることは確かである。それは、「南京事件論争攻防戦」の道具としての使用にのみ用いられてきた感があった。しかし、本論で見えてきたとおり、日本で出版された『南京の真実』はあまりにも貧弱で問題も多い。おそらく「論争攻防戦」の道具には成りえなかつたばかりか、逆にその欠陥部分が無駄な論争の火種を撒いたりさえする。ジョン・ラーベの日記は本来、史料として残したのではなく、個人の日記であった。南京攻略前夜から陥落、日本軍の占領まで、その場で起こったことを目の当たりにしてきた一人の人間の赤裸々な記録である。

アンネ・フランクの日記、あるいはヴィクトール・フランクルの『夜と霧』などと共に、戦争と人間の記録としても「超一級品」であるはずだ。ラーベの日記の中に、次のようなエピソードが登場する。安全区に押し入った日本兵が難民女性を強姦しようとしたのをラーベたちが止め、ラーベと居合わせた日本軍将校が兵をビンタして放免するというものである。この場面は、中国映画『南京！南京！』¹⁵にも登場する。映画を観た人びとはこの場面にショックを受けたことだろう。大量殺戮、あるいは虐殺が行われたとされる「南京」で起きた強姦とビンタ。このような出来事の記述は、事件としては小さいけれども、人に強い衝撃を与える。ラーベの日記にはそれがある。ジョン・ラーベの日記から、ラーベが書き残したかった「南京の真実」を読み取ることも我々に与えられた課題であると思う。そのためにも、今一度、ジョン・ラーベの日記は新しい角度から、再評価されねばならない。再評価の基礎として、徹底的な基本研究が必要であることは言うまでもない。そして、それは「南京事件」の加害国としての日本の研究者としての使命の一つであると思ふところである。中国では全力、南京事件への研究を精力的に行っている。今回の「ラーベ日記」の検討で『南京大屠殺史料集』等の中国側翻訳史料出版物の翻訳の的確さと慎重さは評価に値するものであることも確認できた。日本での「南京事件論争」という内戦を一日も早く終結させ、加害国としての研究を被害国中国と変わらぬ高度な研究の成果として纏め後世に残すことが肝要であると思ふ。

多く残されている海外の資料の原典に深く接近することがより正確な歴史の構築に結び付くことは言うまでもない。こうした取り組みが現在、日本であるいは海

¹⁵ 2009年中国映画、陸川監督作品。

外でと通用している「南京事件」の言説に対して変化をもたらし、「南京の真実」へより近づく道を開く可能性もあるだろう。

その一つの活動として、ジョン・ラーベの日記の基礎研究は続けられなくてはならない。その研究活動はさらに、日本ではその評価が固定化されてしまったアイリス・チャンの『ザ・レイプ・オブ・南京』の再評価へとも繋げてゆければと願っている。

参考文献

- Brook, Timothy , *Documents on the rape of Nanking*, the University of Michigan, 1999
- Rabe, John, *THE GOOD MAN OF NANKING The Diaries of John Rabe*, Alfred A.Knoopf.inc, 1998
- Wickert , Erwin. *John Rabe Der gute Deutsche von Nanking*, Stuttgart: Deutsche Verlag-Anstalt, 1997
- Wickert , Erwin. *John Rabe Der gute Deutsche von Nanking*, muenchen: Goldmann Verlag, 2008
- Wickert , Erwin. *Mut und Übermut*, Stuttgart: Deutsche Verlag-Anstalt, 1991
- 约翰拉贝, 『拉贝日记 精装典藏版』金城出版社版、2009年
- 『拉贝日记』、江苏人民出版社版、1997年
- 『南京大屠杀史料集⑬拉贝日记』江苏人民出版社版、2006年
- 『南京大屠杀史料集⑫英美文书・安全区文书・自治委员会文书』江苏人民出版社版、2006年
- 張純如『南京浩劫 被遗忘的大屠杀』、東方出版社、2007年
- ジョン・ラーベ エルヴィン・ヴィッケルト(編) 平野卿子(訳) 『南京の真実』、講談社、1997年
- ジョン・ラーベ エルヴィン・ヴィッケルト(編) 平野卿子(訳) 『南京の真実』、講談社、2000年
- 細見和之、『言葉と記憶』、岩波書店、2005年
- 畝本正己『真相・南京事件 ラーベ日記の検証』、文京出版、1998年

On the Japanese translation of the diary of John Rabe

NAGATA Yoshitsugu

In Nanking, during the Sino-Japanese war, John Rabe, a German businessman and a member of the Nazi Party, saved many Chinese from the tyranny of Japanese troops by establishing an International Safety Zone. In 1994, the diary of John Rabe was discovered in Germany. In 1997, Kodansha published Kyoko Hirano's Japanese translation.

My paper now compares the Japanese translation with the original German version and sheds light on the ongoing Nanking Massacre research.